

痙性麻痺患者における選択的筋解離術の効果と展望

～痙性治療に特化した病院の役割と地域との連携～

南多摩整形外科病院

○ 理学療法士 クスモト 楠本 キスアキ 泰士 ワカバヤシチサト 若林千聖、ニシノノゾマサ 西野展正、マツオサキカ 松尾沙弥香、タカキケンジ 高木健志

【はじめに】

脳性麻痺・ポリオ患者に対して発達してきた腱延長術や関節固定術などの整形外科手術は、主な痙性筋と考えられている多関節筋を中心に解離することで単関節筋の活動を促し動作を安定させることを目的に、現在では選択的痙性コントロール手術・選択的筋解離術(以下、筋解離術)と呼ばれ発達してきた。現在ではその対象を脳卒中後の痙性麻痺や各種変形に拡げており、一定の効果を得ている。しかし、医療従事者の間でも筋解離術は一般的ではなく、その効果や限界について患者に助言できる者は少ない。痙性治療に特化した当院の役割として、地域との連携は欠かせない課題である。よって今回の発表では、脳性麻痺患者や脳卒中後片麻痺患者の症例報告を時間の許す限り行い筋解離術の効果と展望について言及する。

【病院紹介】

78床、年間270～290件の手術を行っており、手術対象は脳性麻痺や脳梗塞後片麻痺などの痙性麻痺患者で、2歳～78歳と様々な年齢層の方々が北海道から沖縄まで全国各地から来院している。常勤理学療法士5名が術後の患者と外来患者に理学療法を提供している。

【筋解離術の目的】

手術を行う症例・手術を行う部位によってそれぞれの目的は異なるが異常な筋緊張を弱め少しでも楽な状態にし、リハビリテーションを行うことで運動レベルの向上を図ることが一番の目的である。また、変形や脱臼の改善・予防を図り、座位・立位・歩行などの向上に努め、筋緊張による疼痛の軽減・消失を目的に手術が行われることもある。

【筋解離術の効果と展望】

筋の延長術後は筋力が低下すると言われているが、筋解離術では単関節筋を極力温存し術後に集中的なリハビリテーションを行うことで筋力の早期回復を図ることができる。術後リハビリテーションでは円滑な動作の獲得や新たに獲得した可動域での筋力強化・運動の再学習・可動域の維持・廃用性筋萎縮の予防などを行っている。

【症例1】

脳性麻痺5歳の女兒。平行棒内歩行が可能で主な屋内移動は四つ這いだった。両股関節筋解離術後1カ月にて両クラッチ歩行が見守りにて可能・屋内移動は伝い歩きとなった。8歳の時に両足関節筋解離術を施行し、現在は屋外を両クラッチ歩行・屋内を独歩にて過ごしている。

【症例2】

34歳男性、27歳の時に脳挫傷のため意識不明となり3年後に意識を回復した。四肢の変形強く術前の主な屋内移動はいざり動作だった。両足関節筋解離術・左全足関節固定術を施行し、屋内外にて独歩が可能となった。

【地域との連携】

地域との連携への第一歩として今回の発表にて筋解離術の存在やその効果について認識していただきたい。関節拘縮により立位・歩行が困難になった方や変形による疼痛の軽減に対する筋解離術の効果は大きい。手術の目的を理解することが術後のリハビリテーションや患者指導に活かされると思う。